悪魔来たりて

観月　あき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
悪魔来たりて

【Ｎコード】
Ｎ８１９２Ｕ

【作者名】
観月　あき

【あらすじ】
１３世紀くらいのヨーロッパ、がイメージです。あくまでもイメージです。
黒死病がモチーフになっています。
以前他サイトに掲載したものです。多少手直しをしました。

さながら黒衣をまとったごとく、みな一様に黒い肌。幾百幾千もの屍は、朽ちるに構わず野風にさらされるまま、腐臭を放つまで放置されていた。

（あとで、燃やされるんだ。薪を詰んで、油をかけて）

自身の考えたことでありながら、それは、ひどく恐ろしいことのように思えた。この死病の流行で、今では死体の埋葬さえおぼつかない。この国の人間の半分が死んだと言われる。

外套のフードに顔を隠し、エリクは足早に、その場を立ち去ろうとした。その鼻先に吹き付ける風が、どこからか死体の香りを運んでくる。

もう、未練はないと思った。エリクの愛した少女は亡くなり、あの屍の山のどこかに積まれている。

ならば、エリクがここにいる理由など、もう存在しない。平民・・・それも貧しい下層階級の人間が暮らすこの地域に、彼の姿はあってはならないものだった。

かすかに流れる風は、死の病を運んでくる。

黒死病。

貴賤貧富にかかわらず、かかればまず助かることは期待できない恐るべき病。

彼女、エリクの愛した少女もそのために亡くなった。人かた聞いたとおり、肌の黒ずんだその死体の山から、エリクは結局、少女を見つけることはできなかった。

（早く、戻ろう）

一度罹患すれば、どれほど金を積んだところで、治せる医者などいない。こと貧民街は不潔で、長くこの場にとどまることはエリクにも、ためらわれた。
だが、そう簡単に忘れてしまえるほど、少女との記憶はちっぽけなものではなかった。
エリクはもう一度、死体の積まれた山を見た。火葬を待つばかりの屍たちを。そして、驚いた。
その頂上に、人の姿がある。
いや、とエリクは無意識のうちに呟いた。それは人の姿をとりつつ、人間ではありえなかった。
肌が黒い。だがそれは、ペスト罹患者のそれではなく、たとえるなら漆黒、まさにそんな色をしていた。

（・・・死、神？）

こっちを見た、と思った。かなりの距離があるのに、その黒の瞳が確かにこちらを向いていること、エリクにはわかった。
なんの不思議がある？　ペストは死神の病とすら言われた病気だ。だが、そう思いつつもエリクは冷静ではいられなかった。誰だろうと死を恐れるのは同じだ。
それとも――――。
ふいにエリクは思った。あれは、死神ではないかもしれない。ならば何ものだ？
自身の考えに自問自答する。まさか。

（悪魔）

するとそれは――――悪魔は――――エリクを見て笑った。錯覚ではなかった。確かに。

悪魔は、胸元にさげた黄金の角笛を吹き鳴らした。
音は聞こえなかった。だが代わりに、地から突如として風が吹き上げ、エリクはとっさに目を閉じた。
次の瞬間エリクは周囲を見渡したが、すでにどこにも、悪魔の姿はなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8192u/

悪魔来たりて

2011年10月9日10時25分発行